

---

# エンドレスゴールデンオブザウィッチ～甦る黄金の魔女～

真理の魔女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンドレスゴールデンオブザウィッチ〜甦る黄金の魔女〜

### 【Nコード】

N7469S

### 【作者名】

真理の魔女

### 【あらすじ】

エンドレスシリーズ第2弾！！

北高に飾られたベアトリーチエの肖像画！！

ハルヒの力で魔女は再び甦り悲劇は始まる！

飾られた瞬間から悲劇と永遠の拷問は始まる！！

キヨン、長門は魔女に屈服するか？それともあらがうのか？

## 序章（前書き）

エンドレストラジティが完結してないのに第2弾突入しましたww  
今回はうみねことハルヒのコラボです

魔女や家具、悪魔達の宴で悲劇、惨劇のオンパレードですww  
どうぞお楽しみ下さい！！

## 序章

それはもう起きるはずのないものだった

なのにそれは蘇った

永遠の拷問を虐げるそれは1人の少女によつて甦る

金色の蝶たちは舞い彼女は現れる

彼女に屈服すれば望む物は手に入り逆らえば悲劇は繰り返される

悲劇は彼女が使役する家具や悪魔たちによつて起きる

そう…彼女の名は…

千年を生き無限の称号を司る黄金の魔女『ベアトリーチエ』。

そのベアトリーチエは今1つの高校で悲劇を繰り返す

これはまだ序章に過ぎないだが悲劇の始まりの鐘は既に鳴り響くー

北高午前3時ー

警備員2人が徘徊する

『なあ聞いたか？』

『何を？』

『北高の新しい怪談。』

『ああ、確か昇降口に飾られてる肖像画の女が夜な夜な徘徊してる

つて話だろ？名前なんだっけ？』

『ベアトリーチエだよ！聞けばあの肖像画ここの理事長がオークシ

ヨンで落札して手に入れたんだってよ！』

『マジで！？いくらで？』

『そこまでは知んねーよ。』

…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*

『なあ、今何か飛んでなかったか？蝶みたいな金色のやつ。』

『はあ！？お前なあ！あの怪談には金色の蝶なんて内容にねえぜ。』

『そう、なのか？』

『そつだよ。』

…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*…\*



## 序章（後書き）

てことで第一話始まりました

作者の真理です

これからどんどん魔女や家具を出していくのでご期待下さいー！

## 肖像画の怪談

『ねえキヨン、最近学校騒がしくない？』

とハルヒが相変わらず声をかけてくる

『ああ、学校の肖像画の女が夜な夜な徘徊してるって怪談話だろ？それから学校の警備員が行方不明になった話とか。』

『怪談ねえ…小学校じゃ当たり前にあるけどこの高校あったかしら？』

知るかそんなもん！！

そう肖像画というのは今から半月前にうちの学校の校長がオークシヨンで落札した物である

学校のイメーリアップだなんだで飾ったらしい

だがしかし飾って半月で怪談話って…更にイメーリアダウンだな

部室ー

『今日の部活は夜中の学校に潜入して怪談を目撃するわよ！！』

また始まったな…

『か、怪談ですか？』

ほれ見ろ！！朝比奈さんがもう涙もろになってるんじゃないわよ！！

『午前0時に学校集合よ！！遅れるんじゃないわよ！！』  
非常に眠たい時間だな

『あいよ。』

と相づちを打つ俺だった

てか選択肢はコレしかない！！

『じゃ一時解散！！』

放課後ー帰り道ー

「ニヤー。」

と尻尾にリボンを付けた猫に俺は出会った

『なんだ？飼猫だろ？お前』

「ニャー。」

猫は俺にすがりつきはじめた  
マズいな…うちにはしゃみせんがいるのに  
でもまあ仕方ない

『分かったよ。うちに来な。』

俺のうちにまた家族が増えることになった

## 始まりの悲劇

午前0時―

『遅いわよ!!キョン!!何でアンタばかり遅刻なの!!』  
それは俺が聞きてえよ!

『わるいな。』

『大丈夫ですよキョン君。私も今着いた所ですから。』  
ああ、そうかい。

『…………』

長門こういうの本当は否定派なんだろうな

『じゃ!!怪談探しに行くわよっ!!』

俺達は夜の学校に潜入した

北高昇降口付近―

例の肖像画…

金髪の中世ヨーロッパの服装を思わせるドレスを身につけ左手に指輪を填めている美しい女性の絵

昼は美しく見えるが夜は逆に恐ろしく見える

『学校の警備員が消えたのがこの付近らしいですよ。』

古泉が唐突に話し始めた

『そうかよ。』

『この絵の女性には名前もあるらしいですよ。』

『なんつーんだ?』

『ベアトリーチエ。』

熊みたいだな

と思ったその時

『ねえ?何か変な匂いしない?』

『確かに…異臭でしょうか?』

確かに少し鉄臭いような匂いがしていた

『体育館から臭いますね。』

『じゃ正体を突き止める為に体育館に行きましょ!!』  
俺は体育館に向かう最中…

…\*…\*…\*…\*…\*…

『ん?』

金色の蝶?まさか?

んなわけないだろな

『キヨン!!置いてくわよ!!』

『あー今いくよ。』

体育館付近ー

『この奥から臭うみたいね!』

『この奥だと体育館倉庫ですね。』

ネズミでも死んでるじゃないか?

更に奥に進み体育館倉庫に向かった

しかし体育館倉庫のシャッターには恐ろしい物が描かれていた

『ひっ…!!』

朝比奈さんが脅えるのも当たり前だった

何故ならシャッターには血で描かれたような魔法陣を思わせるよう

なモノが描いてあったのだ。

因みにハルヒはというと

『すごい!!怪談も進化するものなのね!!』

進化以前の問題だ!!

『長門、何見てんだ?』

長門は体育館倉庫の窓ガラスから何かを見つめていた

俺も見てみることにした

『!!』

倉庫の中にはうちの学校の生徒が何人も死んでいた

頭が半分ない奴や顔がない奴…人間じゃまず有り得ない殺し方だった

死んでる連中の中にどこかで見たような人がいた



## 心の傷と異変の前兆

『うるさいわよ!!みくるちゃん!!』

ハルヒが大激怒する

つかお前もな

『コレを見て黙っていられるわけありません!!』

これが朝比奈さんが初めてハルヒに反抗したと思う

『倉庫の中で人が死んでるんですよ!!』

『ちよつと見せなさ…ひっ!』

ハルヒが少し朝比奈さん化した

『この中に…鶴屋さんもいるんですよ…ああ…あああああああああああああ!!』

朝比奈さんは嗚咽するように泣き始めた

『おい!!そこで何してるんだ!!君たち!!』

ヤバい警備員に見つかった!

このままじゃ犯人扱いされる可能性大じゃねえか!

『体育館倉庫内で人が死亡している。』

そこサラツと言うところじゃないぞ長門

『え?!本当かい!どれどれ…うわっ!!と、とにかく警察を呼ぶ必要があるな。君たちは其処を動かないように!』

俺は警察が来るまでの時間…朝比奈さんを慰めることしか出来なかった

その後俺達は1人1人警察の事情聴衆をされ帰った

ああ…絶対停学処分にされそうだな

と思いつながら学校から抜け出そうとした時

…\*…\*…\*…\*…\*…\*

クスクス クスクス

あの金色の蝶と誰かの笑い声が見え聞こえた

翌日ー

朝学校から電話があり俺は停学処分はされなかったがハルヒだけ一週間の停学処分にされた。暫くすると古泉から朝比奈さんはシヨックがデカすぎてしばらく学校に来れないと知らされた

まあ仕方のない事だ

なんたつてあの大親友の鶴屋さんが殺されたんだ

でも鶴屋さんって誰かに恨みとか買われる人だったか？いや有り得ない！絶対有り得ない！

てかこんなこと考えるのならしゃみせんとあの猫にエサをやらねばならん

アイツ名前何しようかな…メスだし…リボン付いてたからボン？…じゃオスっぽいだろ！！

妹と考えよう

と思いつながら学校の支度をし始めた

しかし俺はまだ知らなかった

あの猫の正体がとんでもない事だと！！

俺はハルヒのいない学校生活1日目を過ごし始めた

しかし俺は知らなかったあの事件が起きてから俺の身の回りに更に悲劇が起こることを！

その日の昼

俺はパンを買いに購買部に猛ダッシュで行った

なぜならすぐ人混みで大変なことになるからだ

その日の俺は妙に腹が減ってたので10個ぐらいパンを買った

だか帰り道先生に足止めで応接室にある灰皿を校長室に移しておくようにと言われてたので仕方なく俺は応接室に灰皿を取りに行ったしかし俺はまだ知らなかった！

このあと宇宙人以上にとんでもない存在に出会うことになることを

!

## 謎の七姉妹と魔女の話

俺は応接室に入りガラス製の変わったデザインの灰皿を取ろうとした瞬間――

フワツと灰皿が軽々と浮いた

こ、これが噂に聞くポルターガイスト現象か！？  
すると……

……\*……\*……\*……\*……\*

あの金色の蝶たちが現れた

更に……クスクスクスクスクス

とあの笑い声も聞こえてきた

……\*……\*……\*……\*……\*……\*

金色の蝶は所々に集まり人の形になり七人の同い年くらいの子が現れた

まあ下半身がちよつとアレだが

先生見たらけしからんってやつだな

『な、何なんだよお前ら！うちの生徒じゃねえよな？てかその灰皿返してくれよ！校長室に戻すんだよ！』

俺は説得を試みたが灰皿を持っている緑色に薄茶色がかったロング

ヘアの女子が

『いやよ 絶対 こんなデザインの物手放したら勿体ないわよ』

『私にも触らしてよぉ〜！』

泣きながら緑色のVカットの女子が強請る

『それよりお腹空いたよ〜あつパンだ もーらいつ』

『あつ俺の昼飯返せよ！』

『だめえ』

金髪のツインカールの女子が俺の昼飯を奪いやがった

『大体お前一体何者なんだよ？宇宙人の類か？』

『宇宙人？私たちはそんなじゃないわ！』

と傲慢そうな黒髪の子が言い張る

『我々はベアトリーチェ様の忠実な家具だ!』と古風な喋り方をするVカットで片方中途半端に髪を結んでる女子が言う

『か、家具?』

俺は理解不能だった

『ベアトリーチェ様ってあの肖像画の奴の事が?』

『この無礼者!ベアトリーチェ様は偉大なお方よ!このクズ人間が!!!』

銀髪のカールヘアの女子がハルヒ並みに怒る

『あー悪かったよ。それよりパン返してくれよ。』 『モグモグん?なあに?』

俺の昼飯はすでに金髪のカールヘア女子に食い荒らされてた

『あんまイケメンじゃないなあ。』

と金髪のツインテールの女子が呟きながら俺を見つめる

コイツらまさかハルヒの力で発生したハルヒの性格の分身とかじゃないよな

それだったら厄介だな

それじゃなかったら古泉の所の奴か?

ああ考えれば考えるほどワケわかんねー!!

そんな事を考えてると

『それよりアンタこそ誰よ!!』

『うわあ〜サタン姉こわーい』

『こわいこわーい』

『アスモー!ベルゼー!』

『なんだお前ら名前あるのか?』

『あるに決まってるでしょ!!失礼ね!私は七姉妹の長女の傲慢を司るルシファーよ!』

『そうかい俺はキヨんだ。で、そこキレてる白髪が次女ってところか?』

『私は三女のサタンよ！後白髪じゃなくて私は銀髪よ！』

『私が次女のレビィアタンよ！』

『あ、レビィア姉いたんだ』

『いたわよ最初から！私を忘れないでようわあ〜ん！』

次女はまた泣きじゃくり始めた

さっきの雰囲気からしてサタンは怒り、レビィアタンは嫉妬つてところだな

『私は四女の怠惰のベルフェゴールだ。』

とてもコイツは怠惰に見えん！

『私は五女の強欲のマモンよ よろしくね』

灰皿を返してくれない時点でお前は大体分かる

『ふーでふあたしがほくしよのひしょくかのへえるせぶぶふあよ

(訳：んで 私が六女の美食家のベルゼブブだよ)』

『ベルゼ！食べながら喋らないの！』

『ふあーい。(訳：はーい。)』

『因みにさっきの訳は六女の美食家のベルゼブブよ！』

『サタン姉〜勝手に言わないでよ！ブーブー！』

『あなたがしっかり言わないからでしょ！それよりあなたは美食家じゃなくて暴食でしょ！』

『いーじゃん別に！』

『で最後に七女の色欲のアスモデウスです』

喧嘩してる二人すつ飛ばしてよく自己紹介できるな

『これで私達のこと分かってくれた？』

ルシファーが言い張る

『あー分かったよ。それよりマモンだっけか？頼むからその灰皿返してくれ。じゃないとこっちも困るんだよ。それからベルゼ！パン全部食うなよ！俺の昼飯がなくなる。』

『いやよ！絶対！』

『ごめーん 全部食べちゃった また買えば良いんじゃないの？』  
最悪だ…

『じゃあよ、マモン灰皿はそのままお前にやるから後で校長室に俺の代わりに必ず置いてくれよ。』

『気が向いたらそうするわ。』

それから夜中のこと聞いてみるか…

『えっと…緑の何だっけ？』

『レビイアタンよ！忘れないでよ！うわあ〜ん！』

『分かったから泣かないでくれ。夜中の殺人事件のこと知ってるか？』

『殺人事件？ああベアトリーチエ様への生贄の儀式のこと？』

『凄かったよねアレ。ねーベルゼー』

『そうだねアスモ。顔はグチャグチャ。撲殺って感じ。』

『アハハ』

ベルゼとアスモが仲良く話に突っ込んでくる

『儀式って？何の儀式だ？』

『ベアトリーチエ様を蘇らせる儀式よ。』

とルシファーが首を突っ込む

『ルシファーお姉様勝手に答えないでよ！うわあ〜ん！』

『あなたが回答するのが遅いからよ！』

頼むから細かいことで喧嘩しないでくれ

『じゃあ死んだ6人はあの肖像画の奴を蘇らせる為に殺されたのか？』

『うっ…そうよ。』

涙もろにレビイアタンが答える

蘇らせる為に何であんな無残に殺されるんだよ！

何で…何で…鶴屋さんまであんな目に会って死ななきゃなんないんだよ…！

『でも安心しなさい。ベアトリーチエ様は無限の魔法で生贄になった人間達を易々蘇らせることが出来るわ。』

マモンが妙なことを言い出す

『無限の魔法？それで生贄の奴ら生き返るのか？』

有り得ない！死んだ人間を蘇らせるなんて！

『まあ何れベアトリーチエ様はあなた達人間の前に出てきてくれたら魔法を見せてくれるでしょうね。』

『いつ来るんだよ？そのベアトリーチエはよ。』

『ベアトリーチエ様は傲慢で強欲で気紛れなお方、いつおいでになるかは分からないけど蘇ったのは確かだよ。』

『蘇った！？じゃあ…鶴屋さん達は本当に…』

『儀式が偽物だと思ってたの？あれは全て事実なのよ。』

『ルシ姉ももうここでキヨンと話すのつまんないから帰ろうよ。』

とアスモが駄々をこね始めた

『そうねアスモ。では帰りましょうか。』

『ちよつと待てよ！まだ話が！』

『じゃーねキヨン またパン買ってね』

お前におけるパンなんてねえ！

…\*…\*…\*…\*…\*…\*

七姉妹は金色の蝶となって消えた

くそ！なんなんだよ！

一体この学校に何が！

何が起き始めてるんだよ！

## 不審な人物？と妙な話

くそー！ベルゼのせいで全部パン食われた！

どーすんだよ俺ー！

もう購買終わってんぞ！

授業終わったらハルヒには悪いが今日は部活は休んで帰る！

すると女子たちの小話が聞こえてくる

「ねえねえ見た見た？」

「何を？」

「金髪の杖持った女の人」

「あー見た見た図書室で 凄く綺麗だったよね」

「やっぱりー あとキセル持ってたような？」

「でもあの人どっかで見覚えがあるような無いような…」

「うーん」

図書室で？金髪の杖を持った女？いたっけか？うちの学校の生徒に？  
しかもキセルってこの学校禁煙だろー！

明らか大人だよなおい。英語の外国教師だつてうちの学校の先生は  
金髪じゃなかったし

見間違いだろアイツら！

すると今度は男子の小話が聞こえてくる

「なあ見たか？国木田！」

「つて！寄りによつて谷口と国木田かよ！」

「ん？何を？」

「あーもー分かってねえな！屋上に金髪の赤いミニスカート履いた  
チヨー美人な女の人が居たんだよ！美し過ぎて声かけられなかった  
んだけどよ！」

「ふーん。綺麗な花には毒があるって言うから気をつけてね谷口君。

「なんだよそれ」

半分くだらない話だった

だが金髪で赤いミニスカートを履いた美人の女…

さっきの女子たちの話の女と同一か？…まさかな…

俺は空腹の最中考えながら教室に帰った

すると教室がざわついていた

その原因は俺の机にあった！！

何とパンが山積みようにあったのだ！

一体誰か…！！

「？」

パンのすぐ隣に小さな封筒があった

鳥のような模様の付いた印鑑が押してある封筒だった

俺はすぐさま封筒開けた

すると手紙が入ってた

## 魔女の手紙とベアトリーチエ降臨

手紙の内容はとんでもないモノだった

内容の前に送り主が有り得ない存在だった

宇宙人？未来人？超能力者？

そんな存在じゃない！！

あの肖像画の人物：そうベアトリーチエであった！

まさか：昨日の生贄で本当に蘇ったのかよ！！

手紙の内容はこうだった

初めまして

私は黄金の魔女ベアトリーチエでございます

先ほどは家具たちの無礼をお許し下さい

お詫びとしては難ですがこのパン全てを貴公に差し上げます

黄金の魔女ベアトリーチエより

手紙の内容は以上だった俺は確かに腹は減ってはいたが…しかしこのパンの量はあまりにも多すぎる！！

俺はパンの半分を谷口にやった

それから今日の部活はハルヒが暫くは停学だから行かず自宅へ直行

「ただいまー。」

「あ キョン君おかえりー」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

「なんでお前らがいるんだああ！？」

リビングには妹とあの七姉妹がいた

「お邪魔してるわよ。」

ルシファアはのんきに威張り

「いつの時代も一般人の部屋って狭いわね。」

マモンが文句を言い始めた「もぐもぐ………」

ベルゼは冷蔵庫の食いもんを食い漁っていた

『お前から何しに来たんだ？』

『決まっているベアトリーチェ様の護衛だ。』

ベルフェゴールが律儀に答えた

『はあ！？てことはウチにいるのか！？あの魔女が！？どこに居るんだよ？！』

『ベルフェゴール！私にも答えさせてよお！うわああん！』

レヴィアタンが泣きじゃくる

相変わらずうるせーな

『ベアトリーチェ様ならキヨン君のお部屋だよ』

妹が先に答えてしまった

てか何でお前あんな様すんだよ『妹ちゃん言わないでよお！』

またレヴィアタンが泣きじゃくる

もう泣くのは勘弁してくれ

俺はすぐさまダッシュで自分の部屋に向かった！

バタンツと扉を開けた瞬間

俺の部屋には金髪で赤いミニスカートを穿いた青い目の女がいた

『アンタが…ベアトリーチェ…か？』

『くつくつくつ。いかにも妾が黄金の魔女ベアトリーチェであるぞ。』

『うちに何しに来たんだ？』

『学校の中に居るのも退屈だな。庶民の家に暇つぶしに来たのだ』

『そうかい。じゃあベアトリーチェ、あんたに幾つか質問したいことがあるんだがいいか？』

『くつくつくつ 悪いはないな。良いぞ妾が答えられることなら幾らでも答えてやろうぞ！』

『そうかい、そいつは有り難いぜ。じゃあ1つ目だ。誰がお前を蘇らせる為の生贄を捧げるためにあんな殺人を犯した？』

『そのことは妾でも分からぬ。』

『はあ！？ふざけんな！あれは誰かがお前を蘇らせる為にやったん

』

』

』

』

だろ！！お前の仲間が見てたんじゃねえのかよ！！」

「それにあの生贄は必要だった。では妾今から真実を語る赤を使おうぞ！」

「不必要？赤？」

「正式に言えば赤き真実だ。」

赤き真実？俺にはさっぱり分からん

「妾は体育館倉庫の生贄を捧げる以前から蘇っていた」

「捧げる前から！？じゃあ生贄なしでどうして存在してるんだ！！」

「それも妾にも分からなくてな。気がつけばあのような学校に居たものだ。くつくつくつ」

「どういうことだ？更に分かんねーよ！！」

「まるで何者かが妾が蘇ることを強く願っていたのかもしれない。人の願望は計り知れぬ。」

「もしかしたら……」

「なんだ？妾を復活を望む者を知っておるのか？」

「まあな。今停学処分になってるんだけどな。」

「くつくつくつ 実に愉快愉快」 そんなに愉快な奴じゃねえよ！  
むしろ不愉快な奴だよ！

「で、その者の名は何というのだ？」

「ハルヒ。涼宮ハルヒだ。」

「ほー。そのハルヒとやらは何か力があるのか？」

「まーな。願望が現実の物となる力とかそんなやつだぜ。」

「まるで原初の術のようではないか。くつくつくつ」

「原初の術？」

「魔法にも幾つか種類や称号ある。妾が使う称号の術は無限でのお。」

「黄金の魔女なのに黄金は魔法じゃないのか？」

「黄金は称号であるが黄金の称号は妾が莫大な金を持っている為あの称号だ。」

その後ベアトリーチェは己が使う無限の魔法がどういふものかを一

通り話した

古泉や長門の説明よりもののつすごく分かりやすかった

『無限の魔法はよく分かったけどよ原初の魔法ってやつはどんな魔法なんだ？』

『原初の魔法は創造神を指す者が魔法。簡単に言えばゼロの海から1を生み出す魔法だ。素晴らしいであろう』

『ゼロの海から1を生み出す…か？』

確かに言ってるかもしれないな

ハルヒは怒ってる時間鎖空間と神人を毎回生み出すからな

仮に古泉が以前言ってたハルヒが神かもしれないって点につながるかもな

創造神を指す者が使う魔法…原初の魔法か…

『おい！聞いておるのか？妾は退屈が一番嫌いだ！』

『あー…聞いているよ。』

『なら良い。では妾からも主に問おうぞ。』

『何をだ？あといつまでウチにいるつもりなんだよ？』

『ハルヒとやらはその力で今までどのような事をしてきたのだ？お主がこの妾の問いを答えたら帰ってやつてもよいが くっくっくっく』

『……分かったよ。』

言ったところで古泉や長門は魔女なんて信じないだろうよ

あいつらには魔女なんて仮想的な存在だからな

俺はハルヒがこの高校生活で起こした現象の経歴を全て語った

ベアトリーチェは途中でキセルを吹き始めて少し部屋が煙かったが

我慢して俺は話し続けた

『くっくっくつ 実に妾を退屈させぬような人間じゃのう涼宮ハル

ヒは では妾はこれで失礼するぞ。』

『あー好きにしてくれ。』

『また学校で会おうぞ。くっくっくつ』

会いたかねーよ！…！

…\*…\*…\*…\*…\*…\*

ベアトリーチエは金色の蝶となって俺の部屋から居なくなった  
同時にあの七姉妹も居なくなったと妹が言ってきた

だが俺はまだこの後ベアトリーチエが起こす悲劇を知らなかった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7469s/>

---

エンドレスゴールデンオブザウィッチ～甦る黄金の魔女～

2011年5月9日15時30分発行